

J.Butler の連帯論の考察

—文化翻訳と不安定性の観点から—

大阪大学 人文学研究科 哲学哲学史 博士後期課程 2年

成田玲央奈

J.Butler は、アイデンティティ・ポリティクスを批判し、マイノリティが分断されない仕方で、その差異を保ちながらも広く結びついた連帯を構築する重要性および有効性を主張している。Butler が重視するのは、諸運動を分断することを避け、一見両立するように見えないが、社会的、政治的な一連の目標が重なり合うような諸運動を結びつけることである(cf. Butler, 2000)。こうした連帯がいかに構築されるかについて Butler は、複数の観点から考察しているが、そのうち国際的およびグローバルに広く結びついた連帯を考察する上で重要な概念として「文化翻訳」と「不安定性(precariousity)」が挙げられる。

文化翻訳は、単にある単語を、別の単語に置き換えることを指すのではなく、その作業の過程のなかで、翻訳される事柄が互いに新たな語彙を取り込み、互いを変容させながら練り上げられていくような作業を指す(cf. Butler, 2000)。この翻訳作業の実践により、一見それぞれ相反するような異なる主張を掲げる種々の運動が、単に一つに統合されるのではなく、その差異を保ったまま結びつけられ得る(Butler, 2000, 168)。

不安定性とは特定の人々が、社会的・経済的な支援の外側へと追いやられ、差別的な仕方で暴力に曝されるような政治的に誘発された条件を指す(Butler, 2015, 33)。不安定性に曝されるのは、例えば女性や人種的マイノリティ、無国籍者や貧者など多様であり、不安定性はこうしたカテゴリーを横断して人々を集合させるが、アイデンティティではない(Butler, 2015, 58)。不安定性に曝されている人々が多様であるという点から Butler は、その状況から多様な人々が集合し、広く連帯することで、より強力な仕方で差別や不平等に対する異議申し立てをおこなうことが可能になると考えている。

しかし複数のカテゴリーを横断するとされている不安定性が、その実一種のアイデンティティのように作用し、断絶をうむ可能性をもちうるという指摘がある (cf. 清水, 2019)。たしかに、不安定性のもとに、人々が集合することに抵抗の契機をみる Butler の説明は、不安定性を連帯のための一つのカテゴリーとして措定しているようにみえる。しかし不安定性は条件であって、誰が不安定性に曝されているのかは固定されているわけではない。また不安定性に曝されている人々が、一足飛びにその条件のもとで集合するのではなく、また集合したからといって一つに統合されるのではなく、それぞれの差異が保たれていることが重要である。こうした点は、文化翻訳の観点から連帯構築を考察する際にも言及されており、そのことから不安定性のもとで人々が連帯を構築するという過程に、文化翻訳の実践を見出すことで、不安定性が固定化され、あたかもアイデンティティであるかのように作用する状況を解消することができるのではないかと考える。

したがって本発表では、不安定性の観点から考察された連帯構築の理論に、文化翻訳の実践を導入することで、不安定性のもとに集合する連帯がもち得る問題点を解消することを試みる。